

茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校

研究テーマ：つながりから生まれる学びを創り出す授業実践

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

1 実践の目的

「つながりから生まれる学びを創り出す授業」を具現化させるために、授業者の役割について探求することを目標に掲げた。

具体的には、次の2点である。

- ① “つながりを生み出す教師の日常的・継続的な手立て”について、実践を通して検証した。
- ② 授業参観を通して、“つながりから生まれる児童の変容”を発見し、その因果関係について、臨床的に検証した。

2 実践の内容

(1) 校内研究の体制

講師に、東京大学大学院教授藤村宣之先生をお招きし、ご助言をいただきながら、研究主任をはじめ校内研究部が職員をリードし、全職員で「つながりから生まれる学びを創り出す授業実践」の具現化をめざし、日常的に研究を重ねた。

(2) 校内研究の推進の仕方

年3回の「全体授業研究会」と年4回の「ブロック授業研究会」を柱に、校内研究を推進した。

「全体授業研究会」とは、次の3つをまとめた研究会である。

- ① 管理職と校内研究推進委員、公開授業者及び授業者所属の学年の職員による指導案検討会。

- ② 藤村宣之先生をお招きして、公開授業を全教員で参観。そして、授業後の授業研究協議会。

- ③ 藤村宣之先生による授業づくりに向けた指導、助言を含めたご講演。

「ブロック授業研究会」とは、次の3つをまとめた研究会である。

- ① 低・中・高学年に分かれ、校内研究推進委員を中心とした指導案検討会。
- ② ブロックを中心とした公開授業。
- ③ 公開授業後の授業研究協議会。

「全体授業研究会」と「ブロック授業研究会」の公開授業は、藤村先生の指導・助言を参考に、「導入問題」→「協同探究」→「展開問題」の型で実践し、前述の実践の目的①②について検証を行った。

(3) 研究授業の様子

2月に行った「全体授業研究会」第1学年道徳『ぼくの花さいたけど』での様子を報告する。『ぼくの花さいたけど』の道徳的価値項目は、「親切・思いやり」であるが、授業者は、学級の児童の実態に合わせ、敢えて、道徳的価値項目を「優しい心」とし、授業づくりに取り組んだ。

授業のはじめに、「『優しい』って、どんなこと？」と、児童に問いかけた。そして、授業者は、個人で思考させ、ペアで話し合わせ、児童に意見を発表させ、板書し、全体共有を図った。そして、本時の題材『ぼくの花さいたけど』を提示した。

研究授業では「導入問題」として、「モイ

うのことを思い、花を残したトトの気持ち」を児童に考えさせた。

次に「協同探究」として、授業者は、個人で思考させ、その後、4人グループで話し合いをさせた。そして、個人の意見を聞いた。

「それはどうして?」「どの場面でそう思ったの?」等の「切り返しの発問」を盛り込み、学級全体で交流を図った。

最後に、「展開問題」として、今日の授業で「大切だと思ったこと」や「これからこうしていこうと思ったこと」を児童に記述させた。

(4) 協議会の様子

協議会では、他校から参加した先生方も含め、授業参観者が5から7名のグループになり、次の3点について協議を行った。

- ① つながりを生み出す教師の手立て。
- ② 児童がつながり合った場面。
- ③ つながりから生まれる児童の変容。

各グループでの話し合いは、模造紙に記し、グループごとに発表し、共有した。

その後、講師の藤村先生に、授業づくりについて指導、助言をいただき、質疑にも対応していただいた。



3 実践の成果と課題

藤村先生から、「道徳的価値の『親切・思いやり』とは、他者の存在を意識して、他者が幸せになることを期待して、本人が行動することです。『優しい心』では、他者の存在や行動が伴わなくても完結してしまうことも考えられます。しかし、本時では、授業者の「どうしてそう思ったの?」「どこからそう思ったの?」「誰にそう思ったの?」といった巧みな「切り返しの発問」がありました。そのことで、児童は、「トトがモイラに、

…。」「トトがトトの母に、…。」「トトがモイラの母に、…。」と児童が考えを深め、本質に迫ろうとする様子が窺えました。

今回の授業は、児童を教材に向き合わせることができていましたし、児童と児童をつなげることもできていた、とても参考となる授業だったと思います。」「今回は『導入問題』が、子どもたちにとっては少し難しかったのだらうと思います。導入問題に至るまでの前提活動で安易に映像に頼るのではなく、対話を通して内容をおさえ、その流れを板書に残していけるとよいでしょう。先生方のさらなる挑戦を期待しています。」と、成果と課題を示していただいた。

改めて「つながりから生まれる学びを創り出す授業」を具現化させるための手立てを確認することができた。

4 今後の展開

今年度、私たちは、次のことを学ぶことができた。

授業は、「全ての児童が自分の考えを持つこと」から始めなければならない。換言すれば、全ての児童に自分の考えを抱かせるような「導入」を、授業者は考えなければならない。

そして、児童は、自分の考えをもとに、対話や共有を体験することで、学びを深める。この時最も大切なことは、児童の考えを否定せず、全てを肯定し、児童の言葉をそのまま板書することである。この作業により、児童は自己肯定感を高め、児童と授業者との信頼関係を構築させ、児童が他者への慈しみの心を育む貴重な機会にもなる。

今後は、授業者がより一層丁寧な児童理解に努め、児童の考えを土台とした授業づくりに向けて研究を深めていきたい。